

中村光夫全集

第十四卷

筑摩書房

中村光夫全集 第十四卷
昭和四十八年八月十日発行

著 者 中 村 光 夫

発 行 者 井 上 達 三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発 行 所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一―九一
電話 東京側 七六五一(代表)
振替 東京 四 一 二 三
印刷 株式会社 精 興 社
製本 牧製本株式会社
落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72514 (出版社) 4604

第十四卷目次

今はむかし 3

新しい本と古い本 137

「若い人」「新科学対話」「捨身飼

虎」「信仰について」「福地桜痴」

「西洋音楽史」「惜みなく愛は奪ふ」

「小さき者へ」「二十歳のエチュー

ド」「一九一四年夏」「秘史朝鮮戦

争」「竹の木戸」「ボヴァリイ夫

人」「ペラミ」「城下の人」と「曠

野の花」「明治詩話」「人間坪内逍

遙」「旅芸人始末書」「ビルマの豎

琴」「安曇野」「夏目漱石」「二葉

亭四迷論」「二葉亭四迷・嵯峨の屋

おむろ集」

演劇・音楽・絵画・コラム・選評

三つの新劇 222

「ヘッダ・ガブラー」を見て 224

「かぶき者」シラノ 225

新劇に望む名作の再演 228

「居酒屋」 229

現代性と民族性 232

喜劇と現代 235

文学的観劇記 237

マクベスと福田恆存 242

演劇と文学の結びつき 244

芝居の世界 246

コメディ・フランセーズに思ふ 248

「ハムレット」と「オルフェウス」 250

新劇雑感 252

「夜明け前」 255

舞台のリズム 259

「悪魔と神」を見る 262

蒲生氏郷と名古屋山三……………265

*

ヴェルディと現代……………267

二人のカルメン……………270

読売日響の初演奏をさく……………272

批評を主題とする詩劇……………274

詩の世界に遊ぶ四時間……………275

*

梅原龍三郎展を見て……………277

物と心……………278

日本古美術展の印象……………280

古美術礼讃……………285

ロダン展をみる……………287

ドラクロワ展を見る……………289

ゴーギャン展から……………291

*

起点……………292

論……………330

大波小波……………346

*

芥川龍之介賞選評……………440

太宰治賞選評……………474

野間文芸賞選評……………480

日本文学大賞選評……………483

*

「批評」編集後記……………484

「聲」編集後記……………488

短文・随筆その他

最近の感想……………496

職業意識の蟬脱……………498

批評の精神……………499

新人批評家……………500

「批評」の立場……………501

古典の翻訳	503
講和に対する意見	505
伊勢神宮	506
鳴門海峡	508
事実を知らされない国民	510
室戸岬を行く	511
飛脚と電信	513
お水取りと薪能	515
パリと東京	516
録音と文字	518
石筆	520
文化的自殺・くりかへし・富岡の工場・逆効果・亡霊・「よろめき」と「これでもいいか」・通信省・人間と犬・テレビのアンテナ・一周忌・秀才と鈍才・素人、玄人・踏切の地蔵様	530
普及と保存	532

青春の文学	533
悲しみの虚実	535
旧い帝劇	536
*	
フランス行など	539
巴里より	540
悔いなき生活	541
一年ぶりの雅楽	542
人生の関所	543
わが「食物哲学」	544
死を考へ、死を見る	546
ある日私は	548
昼食難	549
眼鏡	552
縄とび	554
そばを食ふ	557
七月下旬の一週間	559

鳥辺野	562
軽い病氣	564
飛行恐怖	566
恩師	568
六十前	570
二冊の本	571
記憶の穴	574
八月下旬の記	575
「老」の微笑	578
近況	582
私の中の日本人	582
*	
七里ヶ浜の記	587
鎌倉に住んで	589
泉ヶ谷付近	595
*	
師と私	600

呉茂一氏のこと	602
川端康成氏	604
印象	606
唐木順三	609
白井吉見	611
吉田健一	613
福田恆存	614
*	
藤村の顔	621
神西清	624
原田義人	625
越知保夫	629
正宗さん	631
久保田さんを惜しむ	634
辰野隆先生	636
順応と反抗	638
亀井勝一郎氏を憶ふ	644

広津和郎氏を憶ふ……………650

石原寿郎先生を憶ふ……………652

伊藤 整氏を悼む……………653

岩田豊雄氏を憶ふ……………659

空襲のころ……………660

初対面の印象……………663

宮田重雄氏を悼む……………664

*

自作について……………666

自著序跋……………722

追補

ルネッサンス私観……………742

精神と芸術……………754

文化の「遺産」……………760

「無常といふ事」……………769

批評の可能性……………774

文学者の道徳……………776

大岡昇平の文学……………780

文学に接するには……………784

今年の小説ベスト・スリー……………788

北欧……………791

文学者の生命……………801

東風西風……………821

私小説の体質……………830

解説……………

唐木 順三……………839

解題……………

……………853

雜 纂

今はむかし

—ある文学的回想

まだそれほどの齢でもないし、かくべつ面白い経歴があるわけでもないのに、思ひ出話などすることはあるまいと笑はれさうですが、近ごろのやうに、知人や友人が相ついで世を去るやうになると、やがて僕自身もといふ氣になり、今まであまり心にとめなかつた半生がしきりに思ひだされてきます。

これも老化現象のひとつでせう。年をとると未来より過去に、他人より自分に興味が集中してきます。

しかし、これが僕等の年齢にとつて自然なことであるなら、それに逆らふのも愚かな話です。老人もまた生きなくてはならないとしたら、自分の生理にしたがふのが、賢明でせう。

人間の行爲を操つる糸がいつも過去から出てゐるのが眞実なら、過去をどう見るかといふことは、その人の生き方に、つまり将来にかかはつてきます。とくに自分の過去に関して、そのことが強く云へさうです。

未来は不定であるのにたいして、過去はきまつてしまつたものと見るのが一般の常識ですが、それならば過去に我々の身におこつたことがすべて必然かといふとさうでもなささうです。

我々自身が、他人から見れば偶然の存在である以上、我々の生活が偶然の支配をうけるのは、当然ですが、それが大事な場合とくに強く現はれるのは不思議です。人生は大小の選択から成り立つてゐるとすると、昼食に何を食はうといふ決定は、大概予期通り実現するのに、結婚とか職業の選定には、必ず多くの予期しない結果を伴ふのはなぜでせうか。

僕の單調な半生も、このやうな内外の偶然が重なりあつてできてゐるやうで、ふりかへつて見ると、自分の意思など一体どこにあつたのか、疑はしくなります。

僕が旧制の高校にはひるとき、フランス語を選んだのは、あとで僕が文学を職業とするやうになつたことと大きな關係があり、いはば一生を決定した選択でしたが、これも初めから文学者になるつもりでしたことはありません。

ただ中学の終りごろから何となく日本にゐたくない気持ちが強くなり、一生外国で過すため外交官になりたかった。そのためにフランス語と思つたのです。

むろん外交官といふ職業の実態も知らず、自分がそれに向いてゐるかどうかを考へもしない、子供の空想にすぎませんでした。それでも本気で、何も出世しなくてもいい、スペインかメキシコのやうなあまり重要でない国にながく滞在して、半分その国の人間になり、闘牛でも見て暮したいと思つてゐました。なぜ闘牛でなければならなかつたのか、今ではわかりませんが、この夢想は、相当ながく僕のなかで尾をひきました。

高等学校の三年間に、かなり強く文学にひかれながら、大学は法学部を一年やつたのも、自分の文学的資質にたいする疑ひのほか、一生外国ぐらしをする資格が手に入れられるなら、三年ぐらゐはいやな勉強をしてもいいといふ幼稚な打算があつたやうです。

それが、実際、はひつて見ると、法学部の勉強は、そんな甘い考へで追ひつくものでないことがわかつたので、仕方なく文学部にうつる決心をしました。

この決心をうながした動機は、その年の秋満洲事変がおこつたこと、フロオベルの書簡をよんだこと、前年から小林秀雄氏を知つたこと、などであつたと思ひますが、これらは、いづれも外的な偶然と云へないことはありません。

文学部の仏文科にはひつたのは、昭和七年ですが、そのころの東大の文学部、とくに仏文科あたりは、大分いまと様子がちがつてゐました。

東大が官僚を中心とするエリート養成所であるのは、むかしもいまも変らないやうですが、文学部はそのなかで規格にはづれた存在でした。

大体、文学、芸術などに対する社会の評価が低く、芸人などはまともな人間とは見られなかつた時代で、文学者もまづそれに準じる存在でした。文士といへば食へないといふ常識が、世間に通用しただけでなく、文学者自

身にも認められてゐました。

だから文学部を志望する学生は、一般の秀才コースからどこかはづれた一癖ある者が大部分で、さういふ学生の数は当然少なく、入学試験などない学科がいくつもありました。

国文科や英文科のやうに、卒業すれば教師の口がある学科は、それでも志願者も多く、まじめな学生が集まつてきたやうですが、美学科、支那文学科、仏文学科など、先生になる見込みなど先づないところはさうは行きません。

仏文学科は、「就職のない」学科の代表的なもので、入学式の席上、主任の辰野隆先生から、フランス語で就職できる見込みはまづ「絶対にない」から、教師になりたい者は、国文や英文の単位をできるだけとつて、その方の資格を得るやうにと注意されるくらゐでした。

学生たちも、「文学」の魅力に憑かれて、まともな生活を断念したやうな者が大部分でした。むろんなかには前田陽一や小林正のやうに、尋常な秀才もゐましたが、それはむしろ例外で、みなあまり教室には出ず、学校の近くまで来ても、喫茶店にたむろして、同人雑誌の計画をしたり、人より先に読んだ本の感想を得々と述べあたりしてゐました。

アカデミズムへの道がとざされてゐる以上、ジャーナリズムへ向ふほかはない、といふほどの自覚があつたわけではありませんが、好きなものに陶醉して生活を顧みないところまで自分を追ひ込んで行くところに、青年らしい冒険心があつたのでせう。当人はせつばつまつた気持でゐても、はたから見れば、のんびりした時代でした。僕も、かうした空氣のなかでかなり気ままな学生生活を送りました。授業にはほとんど出席せず、そのかはり研究室から本をたくさん借りだして、家で読みました。そのころの研究室は、戦後とちがつてあまり利用する学生はなく、備へつけの本なども大概頁が切つてゐないくらゐなので、つい半年、一年と借りつ放しにして、副手の平岡昇氏に「君のところへ貸した本を催促するのは、端書一枚ですまないよ。」とこぼされました。

しかし、平岡氏は親切な人で、卒業してから僕がフランスに行けたのも、氏のおかげです。学生のころも、む

やみに本をかりて行く僕に、「君は借りた本を読むらしいからいいよ、いくらでももつて行きたまへ。」と規則を無視した貸しかたをしてくれました。

これには先生方の黙認があつたのだと思ひます。辰野隆、鈴木信太郎、渡辺一夫、中島健蔵、豊島与志雄の、教授や講師たちが、研究室で雑談してゐるのに、ときどきぶつかりました。かう名前を並べただけでも、その会話がどんなものか想像がつくでせう。それもただ機智にとんでゐるだけでなく、ほかの先生なら学生の前では云はないやうな話題を、平気で口にするので、実に面白く、本をさがすやうなふりをして立ち去りかねることがありました。これらの神々の歓談にうかがはれる濃密な友情、生きた健全な常識、潔癖な正義感など、はたから聞いてゐると、とてもそこに加はれさうもない一種のひがみとともに強い魅力を感じさせました。あんな研究室はもうどの大学にもないでせう。いまでもその情景を、教室より印象ふかく思ひだします。

高等学校からの友人と、同人雑誌「銃架」をだしたのは、その前年の秋でした。一号きりで消えてしまった雑誌で、反響も皆無といつてよく、いまではだれの手許にも保存されてゐない、いはば幻の雑誌です。

同人は篠原善太郎（美学）林慶二（国文）湯浅隆宗（法学部）佐藤吉次（法学部）など文科と法科とが半々でした。林慶二が卒業後数年してなくなつたほかは、みな健在です。

現在の職業は篠原がある出版社の社長で、多少文筆に縁のあるほかは、すべて堅気の勤め人です。

しかし、当時は、「思想的」に分類するなら、大体左翼かそのシンパといふところでした。そのころの言葉で云へば、「實際運動」に携つてゐる者も二三ゐりました。

「銃架」といふ題名もさういふ意味でだれかがつけたので、僕は「針路」といふのを主張したやうに記憶してゐます。

表紙は白地にロシア革命の兵士たちの写真をセピア色にやきつけてゐました。

しかしそれもただ銃をかついで歩いてゐるだけなので、何の兵士かはつきりせず、セピア一色なので当時の雑

誌としては、ひどく地味な感じになり、左翼の雑誌には見えなかつたやうです。表紙だけでなく、内容もことなく呑気だつたのでせう。

同人の中で一番小説がうまいと見られたのは湯浅で、彼は高等学校の雑誌に、当時の言葉でいふと、新興芸術派風の小説を発表して、仲間才筆を買はれてゐましたが、「銃架」にはたしか左翼運動への共感を表現した小説を書いたはずで、ところが、先日会つてきいてみると、彼は書いたことは確かに覚えてゐるが、題名を忘れてゐました。こんなふうな形は左翼的でもどこか遊びめいた気分があつたため——友達同士が集まつてやる場合、ある意味で自然ですが——一号でつぶれてしまつたのでせう。

同人費はたぶん五円でしたが、僕等が財布に五円札を持つてゐることはめつたにありません。足りないところは本郷通りの顔なじみの店から二三軒広告を出してもらひましたが、ふだんは愛想のいい店主の顔が、金をだす段になると一変するのに、世間を勉強したやうな氣になりました。

この雑誌に僕は「モウパッサンの道」といふ評論を書きました。内容はまつたく覚えてゐませんが、数年後に「文学界」に書かせてもらつた「ギイ・ド・モウパッサン」と大体同じことを書いたのだらうと思ひます。

ちやうど、その年の夏、父方の祖母が病氣で、見舞ひにゆくとすぐ亡くなつたので、半月ほど父の郷里に滞在したあひだに書きあげたのを記憶してゐます。

中村光夫といふ筆名をつかつたのも、このときが初めてでした。なぜ名前を変へたかとよく聞かれますが、本名でものを書くのは氣恥づかしいのと、変名など使ふと何となく一人前になつたやうな氣がしたこと以外に、理由はなかつたやうですが、強ひて理窟をつけると人からつけられた名を一生符丁にしなければならぬのは不合理だといふ生意氣な考へがあつたかも知れません。家族関係から脱けたいといふ半ば無意識の願望もあつたと思はれます。

本名の木庭^{こば}が、よみにくい珍しい姓なので、電話などでも初めての相手にいつべんで通じたことがなく、不便で不快な思ひをたびたびしてゐるので、一番わかりやすい苗字にしようと、中村をまづきめ、あとは中学校の名

簿を見てみると「中村光雄」といふ人がゐたので、字劃をもつと簡単にした方がいいと思つて「雄」を「夫」に変へました。初めは、ふざけ半分の気持もありませんでした。この名の下に一生を終りさうになつてみると、もう少し平凡でないのにすればよかつた気がします。さう悪い名でもないと思つてゐます。自分で選んだものに今さら文句を云つても仕方がありません。

「銃架」は一号で終つてしまひ、残つたのは印刷屋の借金だけでしたが、同人には同じく学内で発行されてゐた雑誌「集団」に加入する道がひらけてきました。

こまかい経緯は忘れてしまひましたが、翌昭和七年四月に発行された「集団」第二号の編集後記を見ると、「銃架」から四人の同人をむかへたとあります。

これが「銃架」が世の中にのこした唯一の足跡ですが、この「四人」がだれだつたかわかりません。僕と篠原は「集団」に書いてゐるので、ここに数へられてゐるに違ひありませんが、あとがわからないので、ことによると、景気づけに、二人のところを四人としたのではないかと思ひます。

「集団」は同じ学生の同人雑誌でも、「銃架」などとは段違ひに名の通つた存在であり、自腹の雑誌を一号だしただけで、そこに加へてもらへたのは、運がよかつたと云へさうですが、実際のところは、「銃架」の内容がみとめられたわけでは少しもなく、同人雑誌をだすやうなグループがあることが知られただけなのだらうと思はれます。

「集団」も、学生の同人雑誌の例をもらはず財政難であり、金をだしさうなのがあるれば、ともかく入れてやらう、といふやうなことではなかつたでせうか。

「集団」は「大学左派」の後身として、昭和五年に創刊されたさうです。はじめは那珂孝平、林熊王（後の秋田実）、長沖一、高見順などが中心になつてゐましたが、僕等の加入したころは、これらの人々はもう学生でなくなつたため、新しい同人が中心になつてゐました。

そのなかには栗原毅のペンネームで参加してゐた高原四郎（元毎日新聞学芸部長）、石川雪を筆名とした萩原文